## はじめに

筆者がブラジルのレジストロを訪れたのは、2013 年 1 月であった。神奈川大学日本常民文化研究所の所員で、民俗学分野の高名な研究者である佐野賢治を研究代表に、ブラジル日系人を対象とした歴史民俗学のパイロット研究として調査科学研究費・挑戦的萌芽研究に応募し、2012・2013 年の 2 年間の「ブラジル日系移民および在日日系ブラジル人の民俗学的研究」を展開していた。筆者は、建築史を専門とすることもあって、建築分野の専門家として、日系移民の住まいと生活の様相を明らかにすることを目的に、10 日ほどの調査に参加したのである。

レジストロを調査対象地区としたのは、この地区が戦前期に開始された国策入植地の最初期に位置し、日本人移民により開発された地区として繁栄し、現在でも日本移民の後継者たちが生活していること、そして、日本文化を大切に保護し伝えていくことを主目的としたレジストロ日伯文化協会の全面的な協力を得られたことによる。加えて、ブラジル国内でも日本移民の人々の住まいや生活文化についてその文化的価値が認められ、2010 年にこの地区の日本移民に係わる建物などが連邦文化遺産に登録されていたからである（「サンパウロ州レジストロとイグアペにおける日本人移民文化の遺産認定」）。

筆者は、さっそくこれらの文化遺産に指定されている建物の視察を行った。筆者は、日本近代の建築の歴史を専門としている。近代建築を専門とするのは、まさしく欧米建築が異なる建築文化圏としての日本の中で、どのように受け取られ、また、定着していくのか、またその定着に至るまでの問題点や改良点など、異文化交流の中でどのようにして欧米建築が定着していったのかに関心があることはご理解いただけよう。とりわけ今回の日本移民の人々の残した住まいに関する研究では、日本の伝統的生活文化がどのように継承されているのかといったことに関心があった。より具体的にいえば、日本の伝統的な建築が存在するのではという期待もあった。残念ながら伝統的な建築も生活もなく、生活スタイルにおいても伝統的なユカ座生活などは見られず、イス座の生活を基本とした住宅建築であった。その意味では、正直、少しがっかりした。ただ、一部、露出した小屋の部材に墨書を見た時は、日本の伝統建築と共通性が感じられた。そして、実際具体的に見ていくと、柱の構造材が内外に露出する真壁構造を基本とし、また、設計基準寸法も 1 間 1818 ㎜（6 尺）のいわゆる尺貫法が確認され、日本人大工の関与が考えられる建物であり、極めて興味深い建物であることを確信した。そして、帰国後の 11 月に視察で得た知見の概要を「戦前期のブラジル移民の建築遺構―レジストロ植民地の事例―」として報告した。

この基礎的調査の終了後、共同研究者との意見交換などを通し、本格的な調査の必要性を感じた。そのため、改めて前回同様に佐野賢治を研究代表者として科学研究費・基盤研究 (B)「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究」を申請し、2015 年から 2019 年までの 4 年間にわたって研究を実施することにしたのである。筆者は、先の調査で、文化財として登録されている日本移民の住まいは、極めて興味深く、文化財としての価値も高いものであること

を確信しつつも、一方で現状では文化財のよりどころとなる各建物の基本データである建築図面が作成されていないことに危惧を感じていた。今後、文化財として修理し、保護していくための基本データがないため、修理もできないし、修理したとしても文化財的価値を損なう危険性があるからである。

そこで、今後の文化財の維持のためにも建物の現状を示す図面の作成は必要不可欠なものと考え、新たな歴史民俗的研究のテーマとして、建築班を組織し、登録された日本移民の住まいの基礎資料となる実測図面の作成を主目的に据えることにした。また、実測調査を実施するため、研究協力者として神奈川大学建築学科特別助教の須崎文代とともに文化学園大学の渡邉裕子准教授、近畿大学工業高等専門学校の田中和幸准教授に参加していただき、建築班を組織し、現地で実測調査を実施したのである。

本報告書は、この調査成果として実測図面をまとめ、また、実測調査から得られた知見を本論として記載している。また、あわせて、資料編としてこれまで筆者らが日本建築学会などを中心に口頭発表してきた報告を、既往研究としてまとめて掲載している。掲載している実測図面が、今後の文化財の維持のために役立てば、これほどうれしいことはない。加えて、今後のブラジル日本移民研究の基礎資料としてもご利用いただければ幸いである。

神奈川大学日本常民文化研究所所員
内田　青蔵